

鹿児島県総合教育センター

平成28年度長期研修研究報告書

研究主題

論理的な記述能力の向上を目指した

学習指導の研究

—文章読解と意見論述の関連付けによる論理的な文章の「型」の活用を通して—

鹿児島県立国分高等学校
教諭 木下 景介

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想	
1	研究のねらい	1
2	研究の仮説	1
3	研究の計画	1
III	研究の実際	
1	研究主題についての基本的な考え方	
(1)	「論理的な記述能力」とは	2
(2)	「文章読解と意見論述の関連付け」とは	2
(3)	「論理的な文章の『型』の活用」とは	2
(4)	論理的な文章の「型」について	3
2	研究主題に関する実態分析と考察	
(1)	実態把握の概要	4
(2)	実態調査の実施方法	5
(3)	実態調査等の結果と分析	5
3	調査結果から明らかになった研究の方向性と検証授業の視点	
(1)	研究の方向性	6
(2)	検証授業の視点	6
4	検証授業Ⅰの実施と考察	
(1)	検証授業Ⅰの概要	7
(2)	単元構想の概要	7
(3)	言語活動の具体化と主な学習活動	8
(4)	授業の実際	9
(5)	検証授業Ⅰにおける指導の工夫	10
(6)	検証授業Ⅰの成果と課題	13
5	検証授業Ⅱの実施と考察	
(1)	検証授業Ⅱの概要	15
(2)	単元構想の概要	15
(3)	言語活動の具体化と主な学習活動	16
(4)	授業の実際	17
(5)	検証授業Ⅱにおける指導の工夫	18
(6)	検証授業Ⅱの成果と課題	21
IV	研究のまとめ	
1	研究の成果	23
2	今後の課題	25

引用・参考文献

I 研究主題設定の理由

高等学校国語の教科指導をする中でたびたび感じることは、近代以降の論理的な文章を読むこと及び書くことに対して、生徒の苦手意識が非常に強いということである。その要因として、第一に、文章読解の際に文章の構成や展開をうまくつかめていないこと、第二に、意見論述の際に主張への道筋が立っていないこと、第三に、表現するための知識・技能が不足していることがあるのではないかと考えた。また、平成28年9月に中央教育審議会の教育課程企画特別審議会部会から出された「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」（以下「審議まとめ」）では、国語に関する現状について「伝えたい内容を明確にして表現したり、文章の形式等を正確に理解したりすることに課題がある。」と指摘されている。こうしたことから、生徒が文章を読んで理解し、その上で論理的な記述能力を育成するために、指導の工夫・改善の必要があると感じてきた。さらに、「審議まとめ」の中で示された現行学習指導要領の課題として、高等学校では、「文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて適切に活用すること、多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自らの考えを根拠に基づいて的確に表現すること」などが挙げられている。このことから、論理的な記述能力は、21世紀の社会を生きる生徒に求められているものであると考えられる。

そこで、学習指導要領のねらいを踏まえつつ、先行研究を参考に文章読解のための「型」を活用して文章読解と意見論述を関連付けた指導を試みることにした。ここでの「型」とは、論理的な文章の枠組み的知識を総称して使ったものである。論理的な文章には構成上いくつかのパターンがあるが、これを意識することで段落相互の関係が理解できるし、文章と文章をつなぐ接続詞・副詞を意識することで文章相互の関係が理解しやすくなり読解がスムーズになっていく。このように、文章の構成要素の相互関係を把握するための枠組み的知識を「型」として捉え、この文章読解のための「型」を意見論述にも活用することによって俯瞰的に文章を捉えることができるのではないかと考えた。このことは、文章の構成要素の相互関係を筋道立てて考えることになり、思考力の育成にもつながる。

以上のことから、近代以降の様々な文章を教材として総合的な言語能力を育成する科目である「現代文B」において、文章読解と意見論述を関連付けた指導を行い、論理的文章の読解に必要な「型」を活用させることで生徒の論理的な記述能力を向上させることをねらいとして、本主題を設定した。

II 研究の構想

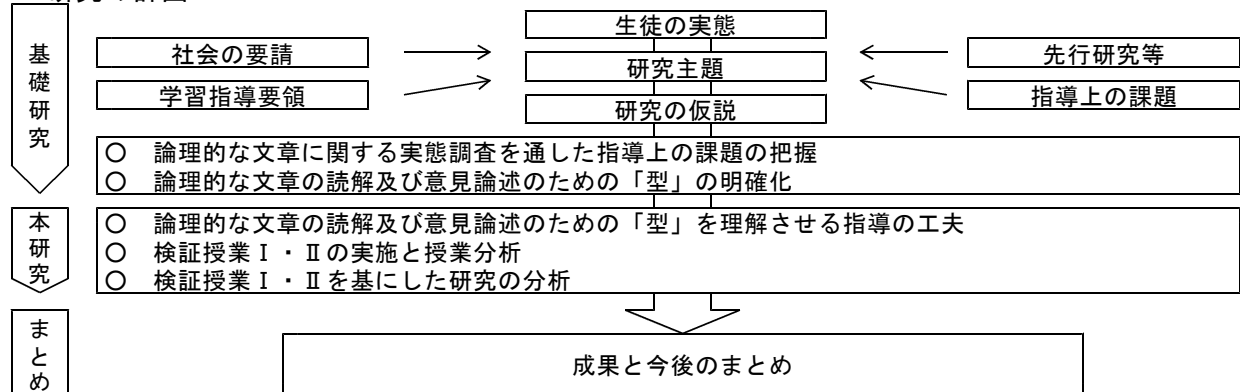
1 研究のねらい

- (1) 論理的文章に対する生徒の意識と学習状況を調査する。
- (2) 文章読解及び意見論述のための「型」を明らかにする。
- (3) 文章読解及び意見論述に「型」を活用する方法を具体化する。
- (4) 文章読解と意見論述をつなぐための学習用教材（ワークシート）を作成する。
- (5) 検証授業などの分析を通して、研究の成果と今後の課題を明らかにする。

2 研究の仮説

「現代文B」において、論理的文章の読解及び意見論述のための知識とそれを活用する方法を明らかにし、文章読解のための「型」を意見論述に活用させれば、論理的な記述能力の向上を図ることができるのではないかと。

3 研究の計画



Ⅲ 研究の実際

1 研究主題についての基本的な考え方

(1) 「論理的な記述能力」とは

『高等学校学習指導要領解説国語編』の、「現代文B」の指導事項アの解説において、「『論理』とは、考えの筋道の通し方である。」と記述されている。また、『広辞苑』では「① 思考の形式・法則。また、思考の法則的つながり。② 実際に行われている推理の仕方。論証のみちすじ。」とある。これらのことから考えると、「論理的」とは、論理の法則に従っていることであり、「論理的な記述能力」とは、論理の法則に従った記述の仕方によって表現する能力を意味している。具体的には、論理の形式・法則に従って段落を構成したり、接続詞・副詞を正確に用いて文を順序よくつなげていくことなどに注意しながら、書き手の意図を正確に伝えるように構成や展開の仕方に注意して表現する能力のことである。

(2) 「文章読解と意見論述の関連付け」とは

本研究では「読むこと」と「書くこと」の指導領域に焦点を当て、この二つの領域に関わる指導事項を効果的に指導することを目的としている。

「文章読解」とは、文章の内容を読み取るだけでなく、文章の構成や展開の仕方を把握した上で、要旨を捉え自らの考えを深めることである。また、「意見論述」とは、与えられた情報を的確に理解し、その価値を評価して自らの意図を正確に伝えられるように表現や内容を整理するとともに、論拠を明示するなどして自らの意見を表現することである。これらを同じ単元の中で複合的に指導するためには、「文章読解」と「意見論述」を密接に関連付けた単元構想を図ることで、「読むこと」によって身に付けた知識・技能を「書くこと」に活用させることが重要であると考えた。

(3) 「論理的な文章の『型』の活用」とは

「論理的な文章」とは、具体的には論説文や評論文のような文章のことであり、これらの文章には構成や展開に一定の論理の形式・法則がある。文章の構成や展開の仕方を学習することは小・中学校の頃から系統的に行われているが、この構成や展開の仕方において、段落相互の関係や文相互の関係、または語相互の関係にある論理の形式・法則を本研究では「型」と捉えることにした。この枠組み知識である「型」を意識しながら、意見論述や文章読解に活用することが『型』の活用である。

文章理解の主な過程は、ボトムアップとトップダウン^{*1}の二つである。ボトムアップとは、

語や文の意味の理解を積み上げていき、文の内容を帰納的に捉えていく方法であり、文脈に従って冒頭から順に読んで理解していく過程である。一方、トップダウンとは、文章全体から構成や展開を把握し、各意味段落の役割を基に文の意味を演繹的に理解して、語や表現の意味を考える過程のことである（図1）。本

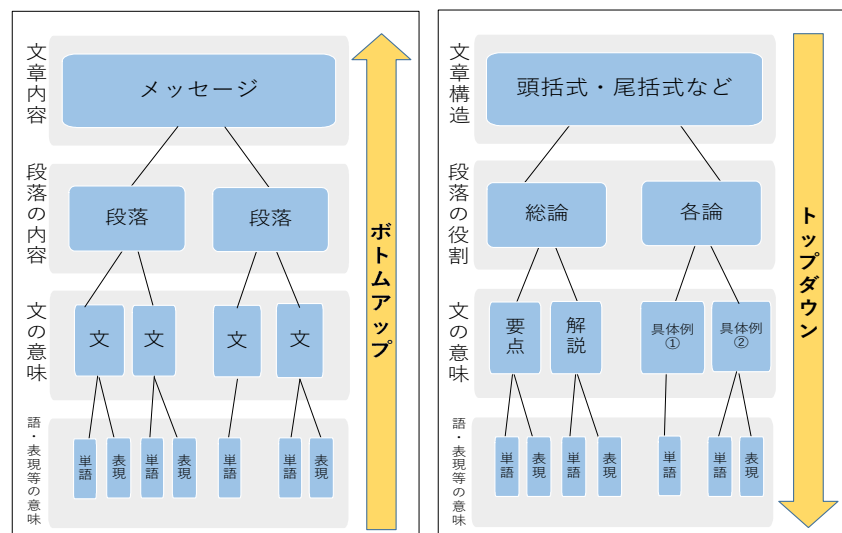


図1 文章理解の過程

*1田近洵一・井上尚美 編『国語教育指導用語辞典』2013 教育出版

研究ではトップダウンの文章理解に着目して考察していく。文章を俯瞰的に把握するために、論理的な文章の「型」を論述に活用することで、先を見通した文章構成が可能となると考えたからである。

論理的な文章には文章の中心となる主要な論点と、具体例、説明、補足、反証などを述べる従属的な論点とがある（『高等学校学習指導要領解説国語編』の「現代文B」の指導事項ア）。そのため、主要な論点が文章のどの位置にあるのかによって、段落の構成が違ってくるはずである。例えば、冒頭に主要な論点があるもの（頭括式）、結尾にくるもの（尾括式）、冒頭・結尾の両方にくるもの（双括式）などのような段落の構成を「型」の一つと考える。

このように、「型」を意識しながら論の展開を文章読解や意見論述に活用し、評価することを「『型』の活用」と捉える。

(4) 論理的な文章の「型」について

先に示したとおり、本研究での「型」とは、論理の形式・法則に従ったものであり、枠組み的知識のことである。これは、文章を俯瞰的に把握するための手段として活用することができる。なぜなら、法則には決まった道筋があり、枠組みは全体を見渡すことで把握されるものだからである。したがって文章読解では展開を予測しながら読むことが可能になり、意見論述では読み手に展開を予測させながら読ませることが可能になる。本研究では以下のような、論理的な文章の三つの「型」（以下、「構成の『型』」・「論理の『型』」・「表現の『型』」）を活用して文章読解と意見論述を関連付けることにした。

構成の「型」とは、段落相互の関係を指す。主に頭括式、尾括式、双括式などの構成の仕方を表す形式・法則のことである（図2）。

論理の「型」とは、文相互の関係を指す。接続詞・副詞によってつながれる、文の接続の形式・法則のことである（図3）。

表現の「型」とは、語相互の関係を指す。修辞法など表現の技法による形式・法則のことである（図4）。

○ 論理的な文章（評論文、論説文など）について

論説文などの論理的な文章では、「序論」、「本論」、「結論」、あるいは「総論」、「各論」、「結論」に分けることが一般的である。この「総論」や「結論」が〔主要な論点〕であり、「本論」や「各論」が〔従属的な論点〕となる。

文章の構成を統括の機能と関連付けて類別すると、主なものは次の三つである。

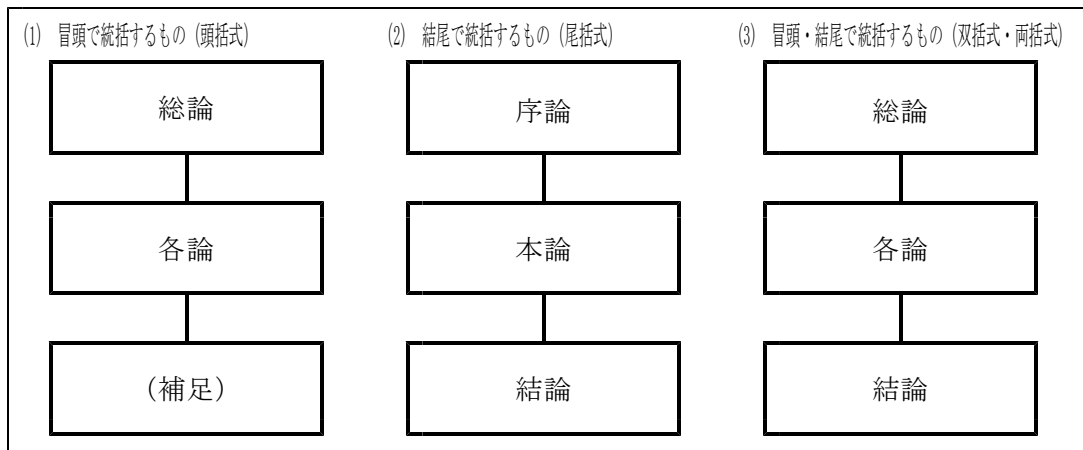


図2 構成の「型」

論理の接続	順接	「だから」 「したがって」 「それゆえ」	条件関係に従った帰結を 予告する。	$A \rightarrow B$
	逆接	「しかし」 「けれども」 「ところが」	条件関係に反した帰結を 予告する。	$A \rightarrow B$
整理の接続	並列	「そして」 「それに」 「かつ」	共通点・類似点のある事柄 を並べる。	$A - B$
	対比	「一方」 「または」 「それに対して」	相違点・対立点のある事柄 を並べる。	$A \leftrightarrow B$
	列挙	「第一に」 「最初に」	共通点・類似点のある事柄 に順序を付けて並べる。	① - ② - ③
理解の接続	換言	「つまり」 「すなわち」 「要するに」	先行表現を分かりやすく 端的に言い換えることを 予告する（要約）。	$A = A'$
	例示	「たとえば」 「とくに」	先行文脈が具体的に理解 できるような例を示すこと を予告する。	$A - \text{例}$
	付加	「しかも」 「加えて」	先行文脈に更に付け加える ことを予告する。	$A + B$
展開の接続	結論	「このように」 「とにかく」	それまでの話をまとめ、 最終的にどのような結論 になるかを予告する。	

参照：村山涼一著『論理的に考える技術（新版）』2015ソフトバンククリエイティブ
石黒圭 著『文章は接続詞で決まる』2008光文社

図3 論理の「型」

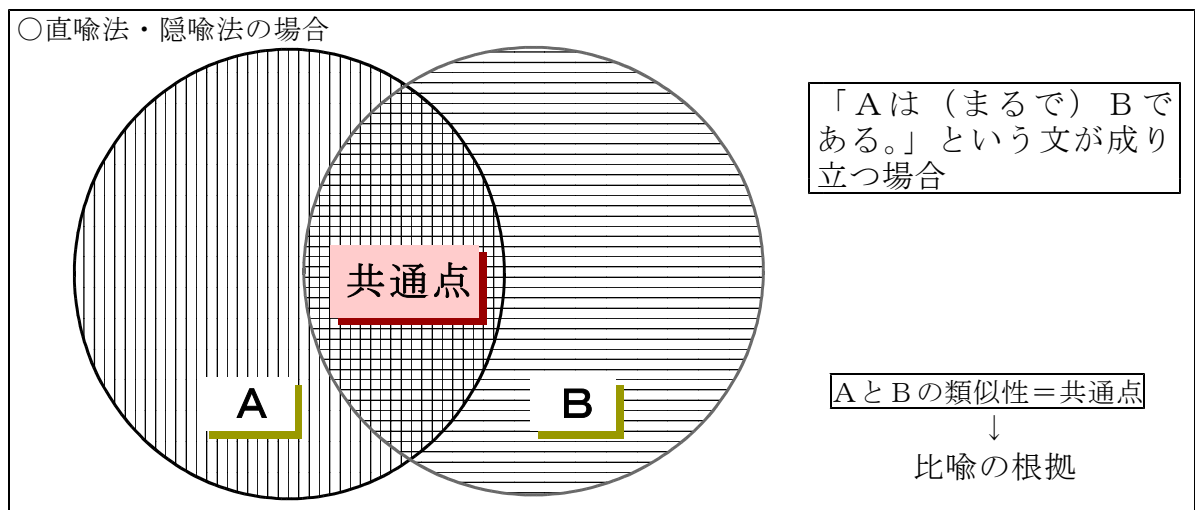


図4 表現の「型」（直喩法・隠喩法）

2 研究主題に関する実態分析と考察

(1) 実態把握の概要

研究主題についての基本的な考え方を踏まえて、本校生徒の実態を、「論理的な文章を読むことに関する内容」、「論理的な文章を書くことに関する内容」、「論理的な文章に関する知識・

理解」の3項目について把握し分析することにした。また、本校の国語科職員にも、論理的な文章を指導する上で工夫していることなどについて調査した。

(2) 実態調査の実施方法

調査等の名称	実施の時期	調査の対象
生徒の実態調査(アンケート)	平成28年6月	鹿児島県立国分高等学校第2学年(275人)
教師の実態調査(アンケート)	平成28年6月	鹿児島県立国分高等学校国語科職員(7人)

(3) 実態調査等の結果と分析

ア 論理的な文章を「読むこと」及び「書くこと」への、生徒の関心・意欲・態度について

アンケートの結果を見ると、「論理的な文章を読むことは大切だと思う。」という項目に対して、肯定的に答えた生徒は84.0%であったが、「論理的な文章を読むのは得意だ。」という項目に肯定的に答えた生徒は24.1%しかいなかった(表1)。このことから、論理的な文章を読解することの重要性は認識しているが、その技能については自信をもてないでいることが分かり、技能を定着させるための学習指導が必要であると考えられる。また、「論理的な文章を読むときに困ることがあれば書いてください。」という質問に対して、「言葉や表現の難解さ」を挙げた生徒が多数いた。このことから多くの生徒が言葉の理解を積み上げて文章を理解していくというボトムアップの読解過程を経ていると考えられる。

表1 論理的な文章を「読むこと」への、生徒の関心・意欲・態度について

(4…あてはまる, 3…ややあてはまる, 2…あまりあてはまらない, 1…あてはまらない)

質問項目	4	3	2	1
論理的な文章を読むことは大切だと思う。	37.5%	46.5%	13.1%	2.9%
論理的な文章を読むことは得意だ。	4.8%	19.3%	60.2%	15.7%

論理的な文章を「読むこと」と同様に、「論理的な文章を書くことは大切だと思う。」という項目に対して、肯定的に答えた生徒は79.6%であったが、「論理的な文章を書くのは得意だ。」という項目に肯定的に答えた生徒は14.9%しかいなかった(表2)。このことから、論理的な文章を「書くこと」については、その技能に対する自信が「読むこと」よりも更に低いことが分かり、文章読解と意見論述についての指導が必要であると考えられる。

表2 論理的な文章を「書くこと」への、生徒の関心・意欲・態度について

(4…あてはまる, 3…ややあてはまる, 2…あまりあてはまらない, 1…あてはまらない)

質問項目	4	3	2	1
論理的な文章を書くことは大切だと思う。	38.0%	41.6%	15.7%	4.7%
論理的な文章を書くことは得意だ。	2.2%	12.7%	51.6%	33.5%

イ 論理的な文章に関する知識・技能について

「段落分けができる。」という項目に対して83.6%、「主張と具体例の区別ができる。」という項目に対して66.5%の生徒が肯定的に答えている。しかし、「文章構成について理解している。」という項目に対して肯定的に答えている生徒は25.9%しかいない。このことから、文章構成についての知識が明確ではなく、その技能が十分に定着していないことが分かる。また、「論理的な文章の要約ができる。」の項目では、23.8%の生徒しか肯定的に答えていないことから、文章の要約に対する自信をもてないでいることが分かる(表3)。

表3 論理的な文章に関する知識・技能について

(4…あてはまる, 3…ややあてはまる, 2…あまりあてはまらない, 1…あてはまらない)

質問項目	4	3	2	1
段落分けができる。	36.9%	46.7%	13.9%	2.5%
主張と具体例の区別ができる。	21.2%	45.3%	28.1%	5.4%
文章構成について理解している。	4.4%	21.5%	50.5%	23.6%
論理的な文章の要約ができる。	2.6%	21.2%	62.0%	14.2%

さらに、「主張と具体例の区別ができる。」という項目に肯定的に答えた生徒の中で、「論

理的な文章の要約ができる。」の項目に肯定的に答えたのは31.4%だけであった（表4）。このことから、要約に関する知識・技能がまだ十分には定着していないために、生徒は要約に対して苦手意識が強いことが明らかになった。

実際に、平成28年3月に本校で実施した「スタディサポート」（ベネッセ）でも同様の結果が見られる。現代文評論読解の問題で、「要旨の把握」に関する問いの正解率は21.9%という結果であり、成績の最上位層（～20%）でも22.4%の正解率しかなかったことを考えると、要約の技能は成績層に関係なく、全体として最重要課題の一つであることが分かる。

表4 論理的な文章に関する知識・技能について

(4…あてはまる, 3…ややあてはまる, 2…あまりあてはまらない, 1…あてはまらない)

質問項目	4	3	2	1
(表3「主張と具体例の区別ができる。」の質問に肯定的に答えた66.5%のうち) 論理的な文章の要約ができる。	3.4%	28.0%	59.3%	9.3%

ウ 論理的な文章に対する意見論述について

本校の国語科職員に調査をした結果、論理的な文章を教材として用いても、意見論述の指導までには至らないことが多いと分かった（表5）。文章読解の指導には工夫をしているものの、意見論述の指導に時間を確保できず、生徒の苦手意識を解消できていない。したがって、指導を効果的に進めるためには、文章読解と意見論述を関連付けることが必要であると考えた。

表5 論理的な文章に対する意見論述の指導について

(4…あてはまる, 3…ややあてはまる, 2…あまりあてはまらない, 1…あてはまらない)

質問項目	4	3	2	1
文章全体を意識しながら読み書きするように指導している。	28.6%	57.1%	14.3%	0.0%
論理的な文章に対する意見論述文を書く指導をしている。	0.0%	0.0%	57.1%	42.9%

3 調査結果から明らかになった研究の方向性と検証授業の視点

(1) 研究の方向性

実態調査等から次の課題が明らかになった。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1 文章読解及び意見論述について、生徒の学習方法が確立されていない。 2 文章の構成や展開の仕方について、生徒の知識・理解が不足している。 3 情報の整理（文章の要約など）の仕方について、生徒の苦手意識が強い。 4 意見論述の指導において、指導の過程や方法が不明確である。 |
|---|

これらの実態を踏まえ、論理的な記述能力の向上を目指した指導の在り方についての研究を進めるために、検証授業を行う上での視点を設定して授業を構想した。

(2) 検証授業の視点

- | |
|--|
| <p>【視点1】 論理的な文章の「型」の理解を深める指導</p> <p>ア 論理的な文章の「型」を指導するための教材や学習過程の工夫</p> <p>イ 「型」を活用した文章読解を基にした要約指導の工夫</p> <p>【視点2】 文章読解と意見論述の関連付けを図る指導</p> <p>ア 文章構造を可視化し、構成や展開を理解させる工夫</p> <p>イ 収集した情報を整理し、意見論述に活用させる工夫</p> <p>【視点3】 論理的な記述能力の向上を図る指導</p> <p>ア 論拠を明示し、構成や展開を明確にさせる工夫</p> <p>イ 説得力のある文章を書くために自らの考えを深めさせる工夫</p> |
|--|

4 検証授業 I の実施と考察

(1) 検証授業 I の概要

ア 検証授業 I の単元名及び実施学年等

単元名	文章の構成や展開，例示など論証の工夫を理解して，自らの考えを表現する。
言語活動	論理的な文章を読み，展開の仕方などを評価した上で，筆者の主張について意見論述文を書く。
教材	岸田秀「恐怖とは何か」(『精選 現代文B』三省堂)
対象	鹿児島県立国分高等学校第2学年1組
実施時期	平成28年7月

イ 検証授業 I のねらい

- ・ 論理的な文章の「型」を可視化することで文章読解の方法を明確にさせる。
【視点1ア】，【視点2ア】
- ・ 「型」を活用した読解を指導することで要約の仕方を理解させる。
【視点1イ】
- ・ 要約で得られた情報を基に，自らの立場と論拠を明確にして意見を論述させる。
【視点2イ】，【視点3ア】

(2) 単元構想の概要

ア 単元構想

検証授業 I では、「読むこと」の指導領域を中心にした学習を計画した。そのため，本単元では，構成の「型」を活用して展開を正確に追い，要旨を的確に捉えることを目標として設定した。また，接続詞・副詞にも着目し，論理の「型」を活用して要約及び意見論述に役立てることもねらいとした。

イ 単元の特徴

本教材は，「自我」をキーワードとし，人間の「恐怖」に対する筆者の考えを精神構造という視点から説明した評論文である。平易な表現で述べられており，高校生にとって読みやすい文章である。また，文章の冒頭部に筆者の主張が示されており，その論拠を提示した上で補足の説明を加えるという頭括式の構成になっており，展開が明確であることから，文章の構成や展開の仕方が把握しやすいと考えた。本教材を用いて論理的な文章の読解の手順を指導し，要約の方法と筆者の主張に対する意見論述の方法を学習させた。

ウ 生徒の実態把握に基づく学習課題の設定

対象の学年及びクラスの実態調査において，「文章の構成について理解している。」と考えている生徒が少ないことが分かった。そこで，論理的な文章の構成に関する知識・技能を高める学習指導が必要であるという生徒の実態を基に，論理的な文章の「型」を文章読解及び意見論述に生かす学習課題を設定した。

エ 単元における評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	書く能力	知識・理解
① 論の展開と筆者の考えを理解した上で，自らの意見を筋道立てて書くとしている。	① 文章を読んで，展開や要旨を的確に捉えている。 ② 文章を読んで，その要旨を論理的にまとめ，自らの意見を構築している。	① 自らの意見に対する論拠を示し，効果的に表現している。	① 書くことに必要な，文や文章の構造的な仕組みについて理解している。

単元における評価規準の設定では，「関心・意欲・態度」において，論理的な文章を読ん

で、論の展開と筆者の考えを理解した上で、自らの意見を論理的に表そうとする態度の育成を目標として設定した。「読む能力」においては、文章を読んで論の展開や要旨を的確に捉えることと、捉えた要旨を基に要約して自らの意見を構築することを目標として設定した。「書く能力」においては、説得力のある意見論述ができることを目標として設定した。「知識・理解」においては、文や文章の構造的な仕組みについて理解し、知識として習得することを目標として設定した。

オ 評価規準を基にした判断基準の作成

評価に関しては、鹿児島県総合教育センターが提唱する「判断基準」を設定した。

評価規準	論理的な文章を読んで、その要旨などを論理的にまとめ、論理性を評価するとともに、自らの意見を構築している。 * この評価規準は、高等学校学習指導要領「現代文B」の指導事項「文章を読んで、構成、展開、要旨などを的確にとらえ、その論理性を評価すること。」及びウ「文章を読んで批評することを通して、人間、社会、自然などについて自らの考えを深めたり発展させたりすること。」を基に作成した。
判断の要素	ア 教材文のキーワードに基づく筆者の主張の理解 イ 筆者の主張に対する自らの意見
判断基準 (B)	ア 教材文のキーワードに基づいて、筆者の主張を端的にまとめている。 イ 筆者の主張に対する、自らの立場と論拠を明確に示している。
判断基準 (A)	(「判断基準B」に加えて) ・ 自らの表現を使って論拠をまとめている。

(3) 言語活動の具体化と主な学習活動

論理的な文章の構成や展開を理解させるのに効果的な言語活動として、高等学校学習指導要領「現代文B」の言語活動例イ「論理的な文章を読んで、書き手の考え方やその展開などについて意見文を書く。」を設定した。その際に、文章の構成や展開、例示などに関する構成の「型」を図解化することで可視化することをねらいとした。具体的には、教材文を読んで主要な論点と従属的な論点とを判別し、その構成から「型」を図解化した上で要約するよう指導した(図5)。また、図解化する技能を基にして、自らの意見を論述するためのメモを作成するよう指導した。

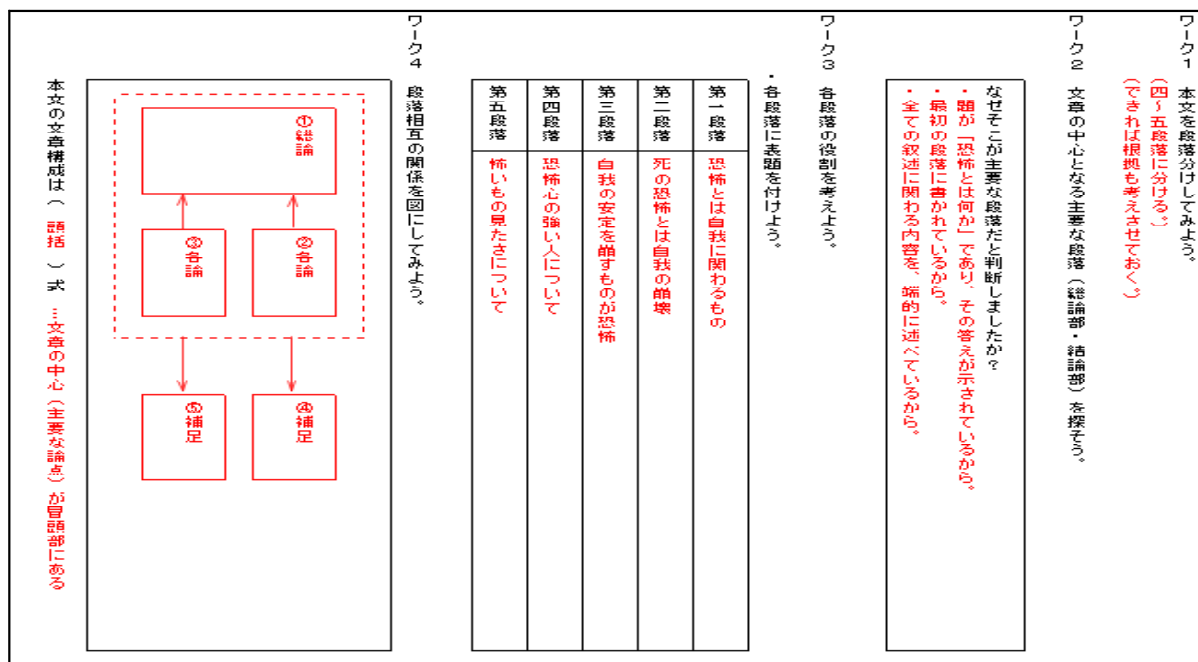


図5 板書計画

(4) 授業の実際

検証授業Ⅰでは6ページに挙げた検証授業を行う上での視点のうち、【視点1】「論理的な文章の『型』の理解を深める指導」と、【視点2】「文章読解と意見論述の関連付けを図る指導」を中心に検証を行った。ここでは、検証授業Ⅰにおける生徒の学習活動と、授業の展開及び工夫について説明する。本教材は文章構成が頭括式であり、本單元における言語活動を実現するのに適切であった(図6)。

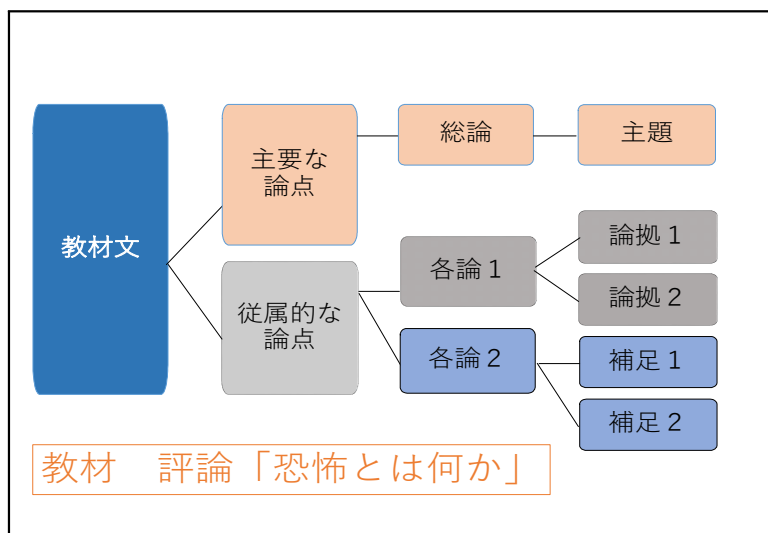


図6 評論「恐怖とは何か」文章構成

第1時における学習課題は、教材文を主要な段落と従属的な段落に分け、主要な段落から要点を押さえることである。生徒は、最初に各自で200字程度の要約(要約①)を行った。次に、本文を黙読して4~5の意味段落に分けた。さらに、その段落の中から主要な段落を探し、それが主要な段落であると判断した根拠を考えた。その後、数名の生徒がその根拠を発表し自らの考えと比較した。最後に、指導者としての段落分けの例を示した。

第2時における学習課題は、主要な段落と従属的な段落を区別することで、それぞれの意味段落に対する理解を統一し、その理解を文章の要約に活用することである。生徒は、最初に各意味段落のキーワードを使って各段落の表題を考えた。次に、少人数集団(4人グループ)の中でお互いの考えを比べ合いながら表題について交流し、その集団で考えた案を基にクラスとしての表題を話し合った。最後に、その表題を使って文章構成図を作成した。ここで作成した文章構成図を参考にしながら、各自で教材文を要約した。

第3時における学習課題は、要約を使いながら、構成の「型」を意識して構想を練ることである。生徒は、第2時で行った要約を参考にして筆者の主張を確認した。次に、その主張に対して、自らの立場(賛成・反対)を決定した。そして、自らの意見の論拠を複数考え、他者との交流によりお互いの論拠を比べ合い、より良いと思う考えを自らの考えを深める参考にした。文章の構成要素が揃ったところで、文章の「型」を決めて構想メモを作成した。

第4時における学習課題は、教材文に対する意見論述文を筋道立てて書くことである。生徒は、第3時に各自で作成した構想メモを確認しながら、意見論述文を書いた。その後、生徒同士でお互いに交流して相互評価した後自己評価して単元の目標を振り返った。

時	主な学習活動と指導上の留意点	主な評価規準
導入 1	1 各自で教材文の要約を行う。 ・ 要約と縮約の違いについて理解させる。 2 段落分けを行う。 3 主要な段落と従属的な段落を区別する。 ・ 主要な段落だと判断した根拠を考えて発表させる。	関心・意欲・態度① 知識・理解①
展開Ⅰ	1 各段落の表題を付ける。(グループ活動) ・ 表題にキーワードを使って端的に示すように助言する。 2 文章構成図を作成する。	

2	<ul style="list-style-type: none"> ・ 構成の「型」を説明し、文章構成図に活用させる。 <p>3 本文を要約する。</p> <p>4 要約を自己評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ キーワードと論理性を観点にして評価するように説明する。 	読む能力①
展開Ⅱ	<p>1 自らの要約を基に、筆者の主張を確認する。</p> <p>2 筆者の主張に対する、自らの立場（賛成・反対）を決める。</p> <p>3 自らの意見の論拠を考える。（グループ活動）</p> <p>3</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教材文を読み直ししながら、主張と論拠の関係を参考にさせる。 <p>4 構想メモを作成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 要約の時に理解した構成の「型」を参考に、構想メモに活用させる。 	読む能力② 知識・理解①
まとめ 4	<p>1 意見論述文を書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 構成の「型」を明示させ、文章全体を捉えさせる。 <p>2 相互評価をした後、自己評価する。（グループ活動）</p>	知識・理解① 読む能力② 書く能力① 関心・意欲・態度①

単元の指導計画の作成においては、段落分け・文章構成図・要約・意見構築・論拠の設定・構想メモ・意見論述文と段階を追って知識・技能を習得するように工夫した。また、思考力・判断力・表現力を高めるように、単元目標に即した指導計画を立てた。

(5) 検証授業Ⅰにおける指導の工夫

ア 論理的な文章の「型」を学習するための教材や学習過程の工夫（【視点1ア】）

本研究は論理的な文章の「型」を習得・活用することが重要なポイントとなるので、「型」を通して文章読解及び意見論述するための学習用教材（ワークシート）を作成した。

例えば、ワークシート①（図7）においては、要約文の横に、グループで話し合って決めたキーワードを記録する欄を並べた。このキーワードは各意味段落の表題として使ったものであり、並置

することで各意味段落の関係を、生徒がキーワードで把握しやすくなるよう工夫した。また、その後の相互評価及び自己評価をする時に、確認しやすくなるようにした。その結果、生徒が文章全体を俯瞰的に把握することができた。



図7 ワークシート①の記述例

また、ワークシート②(図8)においては、意見論述をする際の思考過程を考えて、順序よく進められるように工夫した。具体的には、ワーク1からワーク3へと進めることで、自らの立場を明確にし、論拠を考えさせた上で、文章構成の「型」を決めさせるというものである。その際、構成メモを作る時に目安となる、構成の「型」を黒板で示し、構成メモが作りやすくなるよう配慮した。

ワーク1 能時の要約を読み直し、自分の意見を作ろう。
・筆者の主要な意見に対して私は「賛成」「反対」です。

ワーク2 構成を明確に考えよう。
頭括弧(主張) — 理由・根拠
尾括弧(理由・根拠) — 主張
双括弧(主張) — 理由・根拠 — 主張
↑ 100円紙

ワーク3 構成メモを作ろう。

① 提言
② 根拠

提言	① はじめに自分の立場をいふこと。反対意見は少しにあると考へらるから。
根拠	② 相手の意見は自分の意見と異なるから、相手を納得させるには、相手を納得させる理由にする。根拠をいふ。

図8 ワークシート②の記述例

ワークシート③(図9)においては、意見論述文の裏面に相互評価及び自己評価をする時の評価の観点を示して、到達度を把握できるようにした。他者と交流し、気付いたことをコメントする欄を設けることで、他者からの視点を確認できるようにして、自己評価に生かせるように工夫した。また、自らの意見論述文を評価し、気付いたことを言語化することで言語活動を振り返ることができるようにも配慮した。

グループで閲覧して相互評価してもらおう。

提言	・教材文の内容や筆者の主張を十分に理解している。 ・自分の論拠や具体的事例等を根拠として、適切な理由を示している。 ・文章構成や接続詞の使い方が的確で説得力がある。	①
A	・教材文の内容や筆者の主張を理解している。 ・自分の体験や具体的事例等を根拠として、理由を示そうとしている。 ・文章構成や接続詞の使い方がやや不備があるものの、一定の説得力はある。	○
B	・教材文の内容や筆者の主張を十分に理解していない。 ・自分の考えは示しているものの、筆者の主張や教材文を写しただけである。 ・文章構成や接続詞の使い方に不備があり説得力に欠ける。	○
C		○

コメント(気付いたことがあればアドバイスをしてください)
具伴例(必ず必ず必ず)
具伴例の内容が身近な例でした。
流れがスムーズで読みやすかったです。具伴例一つでも少しは役に立つと思います。

自己評価してみよう

評価(A・B・C)

理由

○ をつけましょう!

図9 ワークシート③裏面の評価例

イ 「型」を活用した文章読解を基にした要約指導の工夫【視点1イ】

事前の調査結果から、多くの生徒が言葉の理解を積み上げて文章を理解していくというボトムアップの読解をしていることが分かった。また、要約の過程や方法を明確には理解できていないことも判明した。そこで、文章全体を俯瞰的に把握することで主要な論点を捉えさせることをねらいとした要約指導を行った。まず、段落分けをして各段落に表題をつけさせた後、その中から主要な段落を探し、段落同士の関係性を把握した上で構成の「型」を判断さ

せる。次に文章構成図を基に要約するように指導していった。こうすることで論理的な文章に対して徐々に焦点を絞っていくという、トップダウンの文章読解を進めさせた。

ウ 文章構造を可視化し、構成や展開を理解させる工夫（【視点2ア】）

文章構造を可視化するためには、文章を図解化することが必要である。まず、段落の構成や展開を理解させることを目的として文章構成図を作成させた。要約をさせる前に文章構成図を書かせることで構成を把握させ、意見論述文を書く前にも文章構成図を書かせることで自らの文章構成を可視化するようにさせた。また、文相互の関係を理解させるために論理の「型」（図3）を活用し、接続詞・副詞を積極的に使って文章を展開させるように指導した。

エ 収集した情報を整理し、意見論述に活用させる工夫（【視点2イ】）

検証授業Ⅰでは、教材文を情報として扱い、その情報に対する意見を論述させることを計画した。教材文を情報とするためには、その教材文の内容を整理して把握し、その価値を評価しなければならない。そこで、教材文の要約の際に、主要な段落がどこにあるかを考えさせて筆者の主張を明確にするように指示した。また、キーワードを意識させることで端的に文章の内容を把握させた（図10）。

まず、ワークシート①（図7）に示すように、各意味段落のキーワードを各自で考えさせた。次に、キーワードについて他者と交流するように指示した。さらに、それぞれの考えたキーワードを発表させて黒板に板書し、クラスとしてのキーワードを話し合った。その際、指導者としての意見も加えて表現を整えた。これらの交流を通して、活発に意見を出し合い、教材文の内容理解が進んだようである。その結果、意見論述の際に、自らの立場を明確に示した生徒が大半であった。

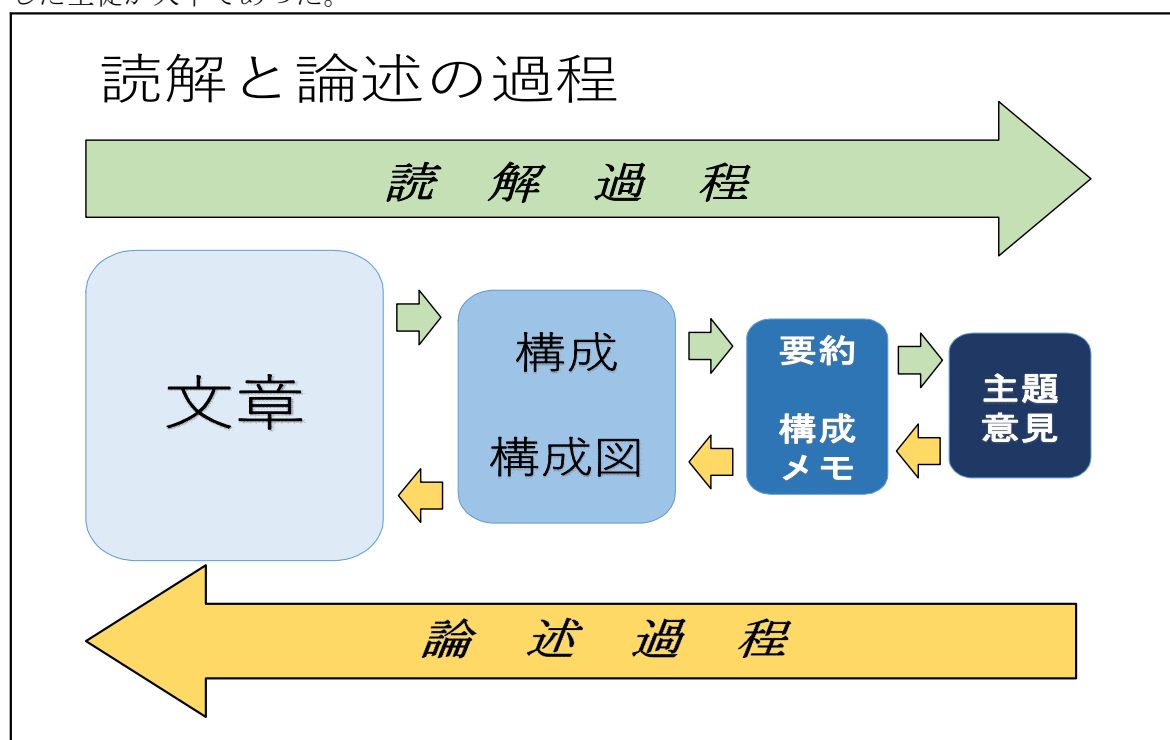


図10 読解と論述の過程

オ 論拠を明示し、構成や展開を明確にさせる工夫（【視点3ア】）

ワークシート②（図8）を使って自らの意見の論拠となる具体例を箇条書きさせた。次に、集団内でお互いの具体例を確認しながら、メンバーの具体例を参考にするように指示した。その際、教材文を再度読み直すなどして確認させ、主張と論拠との因果関係を理解するように助言した。また、接続詞・副詞の説明をして、例示（「例えば」）や付加（「しかも」）、列挙（「まず」）などの接続詞を使うことで、従属的な段落であることを分かりやすく表現するように指導した。

(6) 検証授業Ⅰの成果と課題

ア 成果

(ア) 初読後(要約①)と第2時の最後(要約②)に要約をするように指示した。それらを比べてみると、要約①では要約が完了しなかった生徒が11人いたが、要約②では全員が要約することができた。また、要約①では、教材文の文章表現をそのまま抜き出しただけで、論理性の低いものが多かったが、要約②では接続詞・副詞を適切に用いて論理的にまとめられたものが多くなった。

要約②について、ア「教材文のキーワードを使って筆者の主張をまとめている。」、イ「接続詞・副詞を適切に用いて、自らの立場と論拠を明確に示している。」という観点に基づいて評価した結果、全ての生徒が概ね満足できる状況であった。段落分けの根拠を考えることや文章構成図を作ることが文章要約に有効であったと考えられる。以下に表現例を示す。

生徒A

(要約①：初読後)

人間は、自我に組み込めないもの、自我の安定を乱すもの、自我を崩壊させる危険のあるものが恐怖であり、それが強い人は、自我を狭く固め、自我から多くのものを排除し、抑圧してしまうので、自我を豊かにする必要があるがそれもまた恐怖になるなど退屈しないでかつ安定することはどれも苦痛でありながらもそこにある快感もまた捨てがたく、これらこそがあえて危険なことに挑む冒険ということである。

(要約②：第2時の最後)

人間が感じる恐怖とは、ア自我にかかわるものである。怖がり屋などは自我を狭く固め、自我から多くのものを排除し抑圧して、自我が崩れた時に、恐怖を感じる。イさらに自我の安定を乱すものは自我から排除されたものであるため、それを組み込むと恐怖を軽減することができる。イこのことから、たとえ危険なものでも、自我の安定が崩壊かで恐怖になるものもある。

生徒B

(要約①：初読後)

人間が感じる恐怖のほとんどは自我に関わるものであり必ずしも現実に対応していない。一定の法則に基づく安定した秩序をもつ世界の中に存在し自我の安定があるから世界の法則が覆されることが恐ろしい。退屈しないでかつ安定しているという時間をもつことは不可能であって、それが自我というものをつくりあげた人間の宿命である。

(要約②：第2時の最後)

人間が感じる恐怖のほとんどはア自我にかかわるものである。イ例えば、「怖がり屋」や「怖いもの見たさ」というのは多くの要素を自我から排除し狭く固め抑圧しているからである。イすなわち、人間は自我に組み込めないもの、自我の安定を乱すもの、自我を崩壊させる危険のあるものを恐れる。イしたがって、人間の感じる恐怖は必ずしも現実の危険に対応していない。

(ア) 要約を基に、筆者の主張に対する自らの意見を構築し、意見論述文を書かせた。その際、構成の「型」を選択させて、自らの立場(賛成・反対)を明確に表すように指示したので、意見論述に対する抵抗感は少なかったようである。また、自分の考えた論拠を発表させ、お互いに交流させたので文章構成も明確であった。

評価に際しては、本単元において重点的に育成を図った「読むこと」の評価規準から設定した、ア「教材文のキーワードに基づいて、筆者の主張を端的にまとめている。」、イ「筆者の主張に対する、自らの立場と論拠を明確にしている。」という「判断基準」に基づいて判断した結果、A状況が7人で、B状況が29人、C状況が1人であった。C状況の生徒に対しては論拠の立て方について補充指導を行った。以下にB状況及びA状況の表現例を示す。

生徒C

(意見論述例)

私は、ア人間が感じる恐怖の本質は、自我に組み込めないもの、自我の安定を乱すもの、自我を崩壊させるものといったように自我に関わるというイ筆者の考えに賛成である。

根拠として、私は自分に直接害を与えるわけではないもの、たとえばゴキブリが家に出ただけで声を上げて驚き、たとえ食事中であっても、やっていたことを続けることができなくなるほど、イ何にも害を与えてこない虫に恐怖を感じることがある。また、誰もいない夜道など、イ何もないのに暗いというだけで何が起こるか分からないという状況に、いろいろなことを想像してしまって恐怖を感じることもある。

以上のことから、ア人間が感じる恐怖の本質は自我に関係するものだといえると思う。(B状況)

生徒D

(意見論述例)

私は、ア人間の感じる恐怖のほとんどが自我に関わるものであるという筆者の考えにイ賛成である。

例えば、いつ起こるか予測できない地震に対して人間は恐怖を感じる。これは、イ自我の安定を乱すからである。同様に、金縛りにあった時も恐怖を感じる。これも、イ自我の安定を乱すからである。且常に起こりうることのないような出来事が起こると、自我に組み込むことができずに恐怖を感じてしまう。

以上のことから、ア人間の感じる恐怖は自我に関わるものであると考えられる。(A状況)

* A状況と判断した理由

教材文の主張などを的確に理解しており、冒頭部で端的にまとめられている。また、適切な論拠を示しており、文章構成及び論理も適切で効果的に表現されている。さらに、波線部(~~~~)に、自らの表現を使って論拠をまとめた文章が示されており非常に説得力があると判断した。

イ 課題

- (ア) 限られた時間の中で、構成の「型」を十分に理解させ活用させるためには、文章読解や意見論述の手順を明確にした学習用教材(ワークシートや資料)の工夫が必要である。
- (イ) 接続詞・副詞の使い方や論拠の立て方について理解が不十分な生徒が多数いた。これらをしっかりと理解させ、相互評価や自己評価に活用させる指導を工夫する必要がある。
- (ウ) 今回の学習内容より複雑な文章読解や意見論述にも対応できるように、思考力・判断力・表現力を伸長させるための教材や指導方法について工夫する必要がある。

5 検証授業Ⅱの実施と考察

(1) 検証授業Ⅱの概要

ア 検証授業Ⅱの単元名及び実施学年等

単元名	文章の構成や展開，例示など論証の工夫を理解して，自らの考えを表現する。
言語活動	自らの考えを効果的に表現することで説得力のある意見論述文を書く。
教材	隈研吾「コンクリートの時代」(『精選 現代文B』三省堂)
対象	鹿児島県立国分高等学校第2学年1組
実施時期	平成28年10月

イ 検証授業Ⅱのねらい

- ・ 論理的な文章の「型」を可視化し，文章読解及び要約の方法を習得させる。
【視点1イ】，【視点2ア】
- ・ 目的や課題に応じて，自らの考えを効果的に表現させる。
【視点2イ】
- ・ 文体や修辞などの表現上の特色を捉え，多面的な視点から意見論述させる。
【視点3ア】，【視点3イ】

(2) 単元構想の概要

ア 単元構想

検証授業Ⅱでは，検証授業Ⅰでの学習内容を基に「書くこと」の指導領域を中心とした学習を計画した。そのため，本単元では，自らの考えを発展させ効果的に表現することを中心に指導した。本単元で習得した知識・技能は，論理的な文章の読解及び論述のための枠組み的知識となり，今後の論理的な文章の学習において課題解決に欠かせない知識・技能となると考える。

イ 単元の特徴

本教材は，筆者の専門分野である建築の領域におけるグローバル化を論じたものである。コンクリート建築をモチーフとしながら，今日のグローバルイズムの問題を鋭く指摘している。現代を考えるという点で意外性のある文章であり，かつ高校生が批評的な思考を組み立てる上で，効果的な文章であると考えられる。また，本教材は検証授業Ⅰで用いたものよりも難易度が上がってはいるものの，論理展開は明快で，生徒が学習するのに適した教材といえる。

ウ 生徒の実態把握に基づく学習課題の設定

検証授業Ⅰの際に行った意見論述文を書くという学習活動により，意見論述文の基本的な書き方については理解していると考えられるので，その知識・技能をさらに高めさせることをねらいとした学習課題を設定した。また，検証授業Ⅰの様子から，意見論述に対する抵抗感を感じられないので，自らの考えを深めるための思考力・判断力・表現力を伸ばさせることもねらいとした。

エ 単元における評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	書く能力	知識・理解
① 教材文を参考にした上で，「現代」に対する自らの考えを論理的に表現しようとしている。	① 教材文を読んで，構成，展開，要旨などを的確に捉えている。 ② 教材文を読んで，自らの考えを深めたり発展させたりしている。	① 教材文を参考にした上で，「現代」に対する自らの考えを効果的に表現している。	① 教材文の文体や修辞などの表現上の特色を捉え，自らの表現や推敲に役立てている。

単元における評価規準の設定では、「関心・意欲・態度」において、教材文の内容を参考にした上で「現代」に対する自らの意見を論理的に表そうとする態度の育成を目標として設定した。「読む能力」においては、文章を読んで論の展開や文章構成を的確に捉えることと自らの考えを深めたり発展させたりすることを目標として設定した。「書く能力」においては、「現代」に対する自らの考えを、的確な論拠に基づいて表現することを目標として設定した。「知識・理解」においては、修辞などの表現上の特色を理解し、知識として習得することを目標として設定した。

オ 評価規準を基にした判断基準の作成

評価に関しては、鹿児島県総合教育センターが提唱する「判断基準」を設定した。

評価規準	論理的な文章を読んで、「現代」について自らの考えを深めたり発展させたりするとともに、「現代」に対する自らの考えを効果的に表現している。 * この評価規準は、高等学校学習指導要領「現代文B」の指導事項ウ「文章を読んで批評することを通して、人間、社会、自然などについて自らの考えを深めたり発展させたりすること。」及びエ「目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自らの考えを効果的に表現すること。」を基に作成した。
判断の要素	ア 接続詞・副詞の適切な使用 イ 自らの考えに対する論拠 ウ 自らの考えの深まり
判断基準(B)	ア 接続詞・副詞を適切に用いて、論理的に表現している。 イ 適切な論拠を基に、自らの考えを表現している。 ウ 「現代」に対する自らの考えを深めている。
判断基準(A)	(「判断基準B」に加えて) ・ 多角的な視点から論拠を示している。

(3) 言語活動の具体化と主な学習活動

高等学校学習指導要領「現代文B」の言語活動例イ「論理的な文章を読んで、書き手の考えやその展開の仕方などについて意見を書くこと。」を踏まえて、「自らの考えを効果的に表現することで説得力のある意見論述文を書く。」という単元における言語活動を設定し、自らの考えを深め読み手の興味を引く意見論述文を書くことをねらいとした。具体的には、まず、教材文で使われている比喩法の構造(図11)を活用して、読み手の興味を引きつけやすいテーマを設定するよう助言した。次に、「説得力のある」論述を行うための的確な論拠を立てるように指導した。そして、筆者の論理展開を正確に追い、要旨を的確に捉えながら、文章の論理構造について理解し自らの論述に活用させた。

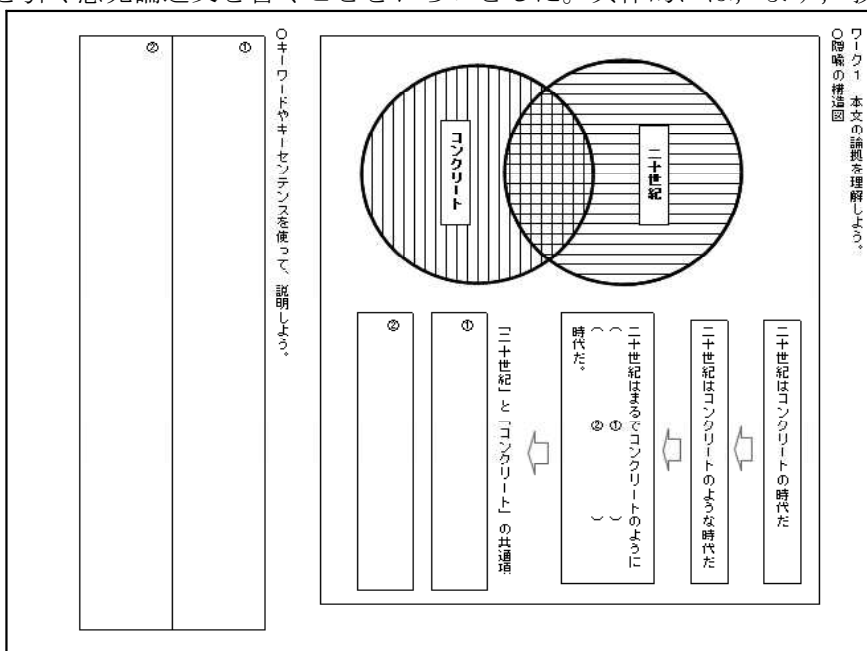


図11 比喩法の構造 (ワークシート①)

(4) 授業の実際

検証授業Ⅱでは6ページに挙げた授業の視点のうち、【視点2】「文章読解と意見論述の関連付けを図る指導」と【視点3】「論理的な記述能力の向上を図る指導」を中心に検証を行った。ここでは、どのように授業を展開し、どのような工夫をしたかについて説明する。まず、授業に入る前段階として、教材文を読んで三つの意味段落に分けておくという予習を指示した。検証授業Ⅰで行った要約についての既習事項を確認し、文章読解にかける時間を短縮することが予習のねらいである。

第1時における学習課題は、教材文の文章構造を理解して段落分けをすることと、接続詞・副詞や比喩法の理解を深めることである。生徒は、検証授業Ⅰで行った学習活動を想起するために、資料(図2)を参考にしながら、論理的な文章で代表的な構成の「型」を再度学習した。また、比喩について理解するため、「表現の『型』」(図4)を用いたワークシートで比喩法(隠喩法)の構造を学習した。さらに、本教材文は接続詞・副詞を効果的に使って文章を構成・展開していることが特長であるので、各形式段落の冒頭にある接続詞に着目して、資料の「論理的『型』」(図3)と照らし合わせながら接続詞・副詞の活用の仕方を学習した。

第2時における学習課題は、前時で学習した文章構成や接続詞・副詞の知識・技能を活用して、文章を要約することである。生徒は、検証授業Ⅰと同様に、それぞれの意味段落に表題をつけて文章構成図を作成し、その文章構成図を基に教材文を要約した。

第3時における学習課題は、意見を論述するための構想を練ることである。生徒は、意見論述文のテーマとして、「現代とは〇〇の時代である」という題を想定し、その空欄にあてはめる語(比喩の対象)を決めるために考えを深める学習活動を行った。その際、文章読解で用いた「表現の『型』」(図4)のベン図を使うことで教材文の文章読解を意見論述に活用した。また、複数の語(比喩の対象)を考え、それを序列化した表を作ることで、自らの考えている内容を可視化した。そして、少人数集団を編成しお互いに交流した後、各自のテーマを決定した。また、テーマに基づいて構想メモ(図12)を作成した。

第4時における学習課題は、効果的に論拠を示して意見論述文を書くことである。生徒は、前時で作成した構想メモを確認しながら意見論述文を書いた。この時に、第1時で配付した「論理的『型』」(図3)を確認し、それを参考にしながら接続詞・副詞を的確に使って論理的に記述することを心掛けた。また、構想メモや「構成の『型』」(図2)を確認しながら、適切な文章構成を基に論拠を明示して自らの考えを論述することにも心掛けた。

第5時における学習課題は、相互評価及び自己評価をすることである。生徒は、まず少人数集団を編成し相互評価を行った。その際に指導者から、ワークシートの裏面に示した評価の観点について説明を受けた上で、1人につき3分の時間内で、できるだけコメントを書くように心掛けた。その後、相互評価の結果やコメントを参考にしながら意見論述文を自己評価した。

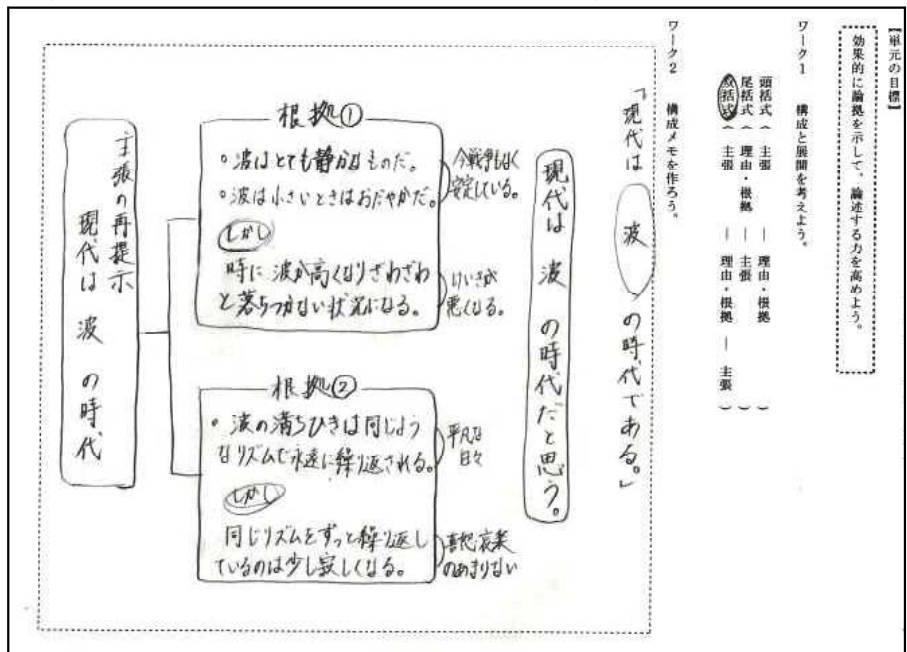


図12 構想メモの記述例

また、評価の理由について書くように心掛けた。

最後に、本単元のまとめも兼ねて、的確な論拠の示し方や考えを深める思考過程などについて振り返った。特に段落構成、接続詞・副詞、比喩を図解化した資料やワークシートを使いながら今後の学習の方向性を確認した。

時	主な学習活動と指導上の留意点	主な評価規準
導入 1	1 段落分けを行い、主要な段落と従属的な段落を区別する。 ・ 主要な段落だと判断した理由を考えて発表させる。 2 接続詞・副詞や比喩法（隠喩法）に対する理解を深める。 ・ 「論理の『型』」（図3）を使って接続詞を説明し、論述に活用するように助言する。 ・ 比喩法（隠喩法）を図解化（図4）して説明する。	知識・理解①
展開I 2	1 各段落の表題を付ける。 2 文章構成図を作成する。 ・ 「構成の『型』」（図2）を参考にして、文章構成図に活用させる。 3 本文を要約する。 4 要約を自己評価する。 ・ キーワードと接続詞・副詞を観点にして評価させる。	知識・理解① 読む能力①
展開II 3 4	1 意見論述文のテーマを考える。（グループ活動） ・ グループで交流しながら、他者の意見を参考にしよう助言する。 2 構想メモを作成する。 ・ 要約の時に理解した構成の「型」を参考にしよう助言する。 ・ 板書で構想メモの例を示す。 3 自らの考えを深めるとともに、論拠を考える。 ・ 教材文を読み直しながら、主張と論拠の関係を参考にしよう助言する。 4 意見論述文を書く。	読む能力② 書く能力①
まとめ 5	1 相互評価する。（グループ活動） ・ コメント欄にできるだけコメントを残すように助言する。 2 相互評価の結果及びコメントを参考にしながら、自己評価する。 3 検証授業Ⅰ・Ⅱの振り返りを行う。	関心・意欲・態度① 書く能力① 知識・理解①

単元の指導計画の作成においては、構成の「型」及び論理の「型」を確認しながら、自らの考えを深めることと的確な論拠を立てることで、説得力をもって意見論述するという、単元目標に即した指導計画を立てた。

(5) 検証授業Ⅱにおける指導の工夫

ア 文章構造を可視化し構成や展開を理解させる工夫（【視点2ア】）

検証授業Ⅰと同様に、要約や意見論述の前に文章構成図を書かせて、文章の構造を図解化することを繰り返させた。さらに、構成の「型」をより細かく図解化した資料などを配布することで、構成の「型」を図として理解させ、構成や展開に役立てられるように工夫した。

イ 収集した情報を整理して意見論述に活用させる工夫（【視点2イ】）

検証授業Ⅱでは、検証授業Ⅰと同様に教材文を基に意見論述を行うが、単に教材文に対する意見論述を行うというものではなく、教材文の構成や展開を参考にして生徒が自らの意見を深められるように学習活動を設定した。

まず授業の導入に当たり、過去の偉人の名言・格言（「人間は考える葦である」、「芸術は

爆発だ」等)を提示して見本を示し、読み手の興味を引き付けるような題名を付けて意見論述することが最終目標であることを説明した。

次に、**比喩法(隠喩法)**の構造を理解させるため、ベン図を使って説明した(図13)。このベン図を意見論述でも活用し自らの考えを深めるのに役立てた(図14)。また、教材文を読解していく中で筆者の主張と論拠との関係について詳しく説明し、各自の意見論述文を書く時の参考にするように指示した。

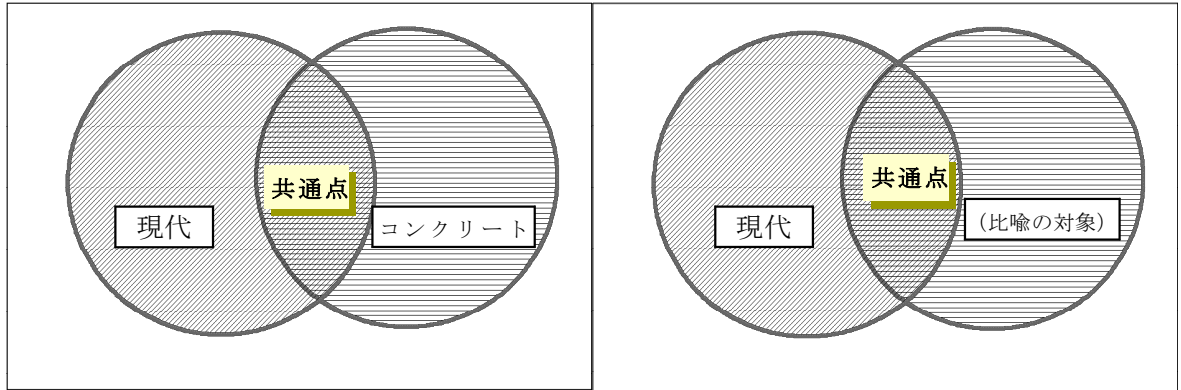


図13 文章読解のベン図

図14 意見論述のベン図

ウ 論拠を明示して構成や展開を明確にさせる工夫(【視点3ア】)

接続詞・副詞を意識的に使うことで論理性を高め、論拠が表されている箇所がすぐに分かるように表現できることを学習目標とした。特に、「論理の『型』」(図3)を用いて、例示を表す「例えば」、列挙を表す「まず」・「次に」、逆接を表す「しかし」などを使うことで論拠が示されている本論や各論の場所を明示させるように生徒に説明した。また、意見論述をさせる際に、論拠の示し方の見本として教材文を参考にするよう助言した。筆者の表現方法を参考にするすることで、論理的な文章の読解を意見論述に活用させるためである。

構成の「型」を選択する際には、頭括式もしくは双括式を勧めた。これは、文章の冒頭部に総論を置くことで読み手に対する書き手の主張が伝わりやすくなり、生徒が限られた時間と字数の中で意見論述文を書き終えるために有効であると考えたからである。そして、尾括式を選択する生徒には、結論を導く文脈を意識して表現するように助言した。以下に接続詞などを効果的に用いて表現した生徒の意見論述の例を挙げる。

私は、現代を「パンの時代」と考える。

パンという食品は、戦後、米不足である日本の食を支え、新しい食文化を作った。その歴史の上に私たちの食生活がある。グローバル化する現代は、外国から様々な物を取り入れ新しい文化を作っている。その先頭をきったのがパンである。

まずパンは原料のほとんどを輸入している。その方が低価格で販売でき、より多くの消費者に購入してもらうことができるからである。しかし、原料を輸入に頼ると日本の自給率は衰え国内の農業が発達しない。現代は輸入があって成り立つ人まかせな時代である。

さらに、パンは速く食べることができる。朝時間がないから主食である米ではなくパンを食べる人が急増している。逆な見方をすれば、現代は「速さ」に依存している。分からないことがあれば考える前に携帯で調べることが多い。少しでも遅いとイライラする。

このような共通点から私は、現代を「パンの時代」と考える。

エ 説得力のある文章を書くために自らの考えを深めさせる工夫(【視点3イ】)

自らの考えを深めさせるための工夫として三つの活動について説明したい。

第一に、文章読解と意見論述の際に同様の図を用いた点である。文章読解では、比喩(隠喩)を図解化したベン図(図13)によって二つの対象の共通点を考えさせることで、「現代」

が「コンクリート」の時代であるという筆者の主張とその論拠を理解させた。その上で、このベン図を意見論述文の構想を練る際にも用いた（図15）。現代の特徴を考えさせ、その特徴（共通点）をもつもの（A）をテーマとして「現代は（A）の時代である。」という意見論述文を書かせた。同様の図を用いることで、文章読解と意見論述が関連付けられ、教材文の筆者の考えを自らの考えを深めるために参考にさせることができた。

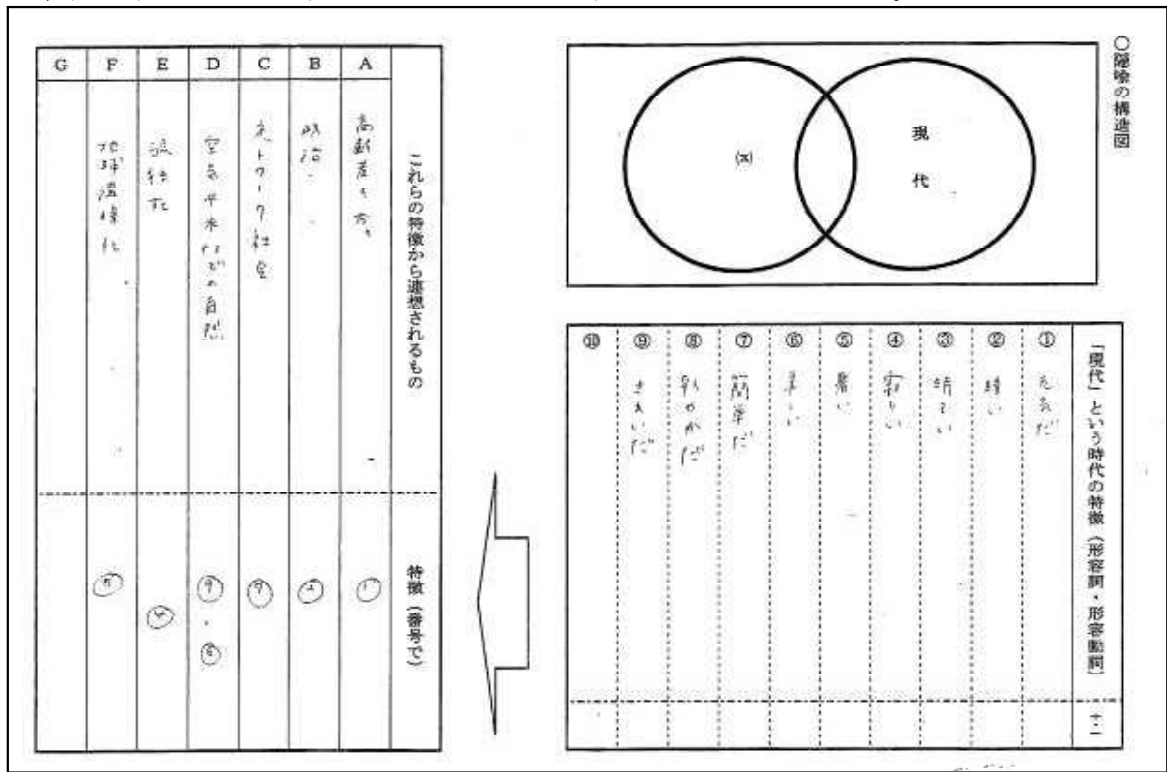


図15 「現代」の特徴の記述例

第二に、比喩の対象として複数のものを挙げさせ、序列化させた点である。生徒によっては比喩の対象として考えられるもの（A）を複数挙げるだろうと想定し、それらを序列化できるようにプリントを作成した（図16）。序列化する基準は現代との関連性である。関連性の強いものは論拠を詳しく示さなくても読み手に理解されやすいが、比喩の対象としては面白くない。これに対して関連性の弱いものを挙げれば、読み手の興味を引くであろうが論拠を的確に示さなければ理解されない。まずは自分で思いつくものを挙げて記録させ、その後、他者との交流によって参考になるものは取り入れるように指示した。生徒は、思い付いたものをそのまま比喩の対象（A）として書くのではなく、思考し判断する過程を経て表現したので、読み手の興味を引くようなテーマによる意見論述文が多数見られた。

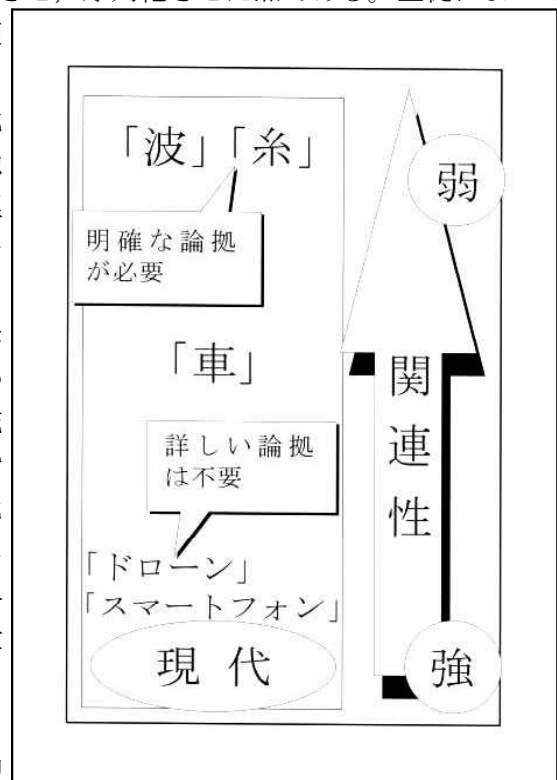


図16 論拠の序列化

第三に、多面的に対象を観察させるために、他者との交流を複数回させた点である。客観的な視点をもたせることをねらいとした学習活動を取り入れて、自らの主張に対する論拠を明確にさせた。具体的には、少人数集団の中で、

お互いの主張及び根拠を比較させたことである。また、相互評価の際には別のメンバーによる集団に組み替えさせた。その際、評価表にはできるだけコメントを書き込むように指示して、そのコメントを参考に自己評価させた（図17）。グループ活動では活発な意見交換が行われており、生徒それぞれの考えが深まる様子が見られた。

○ グループで回覧して相互評価してもらおう。(◎・○・△を付けてください)

評価の観点		◎	○	△
ア	・ 比較に対する根拠が分かりやすく示されている。	◎	○	△
イ	・ 文章構成や接続詞の使い方が的確で説得力がある。	◎	○	△
ウ	・ 独自の発想と深い洞察に基づいて論述している。	◎	○	△

コメント(◎や△をつけた理由を書いてください)
 ・ このことに対して自分なりに考えた。
 ・ 比較に対する根拠が分かりやすく示されている。読者のためです。
 ・ 発想がユニークで、そのテーマと関連性を見つけていくことで、他にない自分ならではの論述ができることを知ることができた。

理由
 ・ 自分独自の発想で、そのテーマとの関連性を見つけていくことで、他にない自分ならではの論述ができることを知ることができた。
 ・ 人と違う見方をすることも大切なんだなあと思った。また、そういう見方を使った小論文を入試でも書きたいと思った。

○ 自己評価してみよう。
 評価 (A・B・C)

図17 評価表の記述例

(6) 検証授業Ⅱの成果と課題

ア 成果

- (ア) 生徒が意見論述文を書く際に、自らの考えを効果的に表現しようとする意欲的な姿が見られた。例えば、授業後のアンケートに、「論文を書くときは論拠が何より大切だということが分かった。」というものがいくつか見られた。これは論拠の重要性を理解したことを表している。また、「自分独自の発想で、そのテーマとの関連性を見つけていくことで、他にない自分ならではの論述ができることを知ることができた。」というコメントから、独創性にも興味・関心が及んだことが分かる。
- (イ) 論理的な文章の「型」（構成の「型」、論理の「型」、表現の「型」）に対する理解が深まった記述が見られた。そして、授業後のアンケートでは、「型」に対する理解を示すものが複数挙げられた。例えば、「文章の型や接続詞の使い方などが理解できた。」、「文章構成の仕組みが分かった。」、「比喻を使うことの大きな意味が分かった。」など、今回の検証授業Ⅱで重点的に説明した部分に関しての肯定的なコメントが多かった。
- (ウ) 順序立てて自らの考えを深めていく過程を進ませることで、思考力の高まりが見られた。「検証授業Ⅱにおける指導の工夫」で説明したような手順によって、比喻するものを考えさせることで、自らの考えを深めることへの意欲が高まり、結果として思考力が向上したと考えられる。以下に自らの考えを深めることに関するコメントをいくつか挙げる。

- ・ 「見方を変えてみたら、思いつかなかったような発想ができたような感じがする。共通点を見つけて比喻を考えるのは、最初は難しかったけどやるにつれて楽しくなった。」
- ・ 「自分独自の発想で、そのテーマとの関連性を見つけていくことで、他にない自分ならではの論述ができることを知ることができた。」
- ・ 「人と違う見方をすることも大切なんだなあと思った。また、そういう見方を使った小論文を入試でも書きたいと思った。」

「自分独自の発想」、「人と違う見方」などのコメントが出されるということは、複数の視点を持っていることを示している。つまり、自らの視点を客観的に見ることで、複数の発想から自らの考えを判断したということである。非常にユニークな意見が多数出されたことは成果として挙げられる。

中でも、「糸」を現代の象徴として挙げたものが二つあったので、意見論述の例として挙げる。ちなみにこの意見論述文を書いた2人の生徒は、お互いが何を書いたかは知らず偶然の一致だと考えられる。生徒Eは「糸」を先に発想し、後から論拠を考えたというこ

とであった。一方、生徒Fは論拠から先に考え、その論拠に合うものとして「糸」と「クモの巣」を考えたと、より妥当なものとして「糸」を選択したということであった。ア「接続詞・副詞を適切に用いて、論理的に表現している。」、イ「適切な論拠を基に、自らの考えを表現している。」、ウ「『現代』に対する自らの考えを深めている。」という「判断基準」に基づいて評価を行った。以下に、B状況及びA状況の表現例を示す。

生徒E

(意見論述例)

私は、現代は糸の時代であると考える。まず、糸は細い。しかし、織ったり紡いだりすることでどんな物にもなるし強くなる。これを現代の人々に例えると、個人では細くて弱いけれど、多くの人と出会って縦や横に様々な人生を織り込んでいけば大きくて強い繋がりになるということである。歌手の中島みゆきさんは『糸』という歌の中で「会うべき糸に出会えることが仕合わせ」と言っている。私もこうした人と人との繋がりこそ「仕合わせ」であると考え。しかし、加えて、糸は人と人との繋がりのように容易に切れてしまうという点もある。糸はひっぱりすぎたり傷つけすぎたりするとすぐ切れる。それぞれの「仕合わせ」のために、繋がり切れないように丁寧に扱わなければならない。以上の二点から、私は現代は糸の時代だと考える。(B状況)

生徒F

(意見論述例)

現代は糸の時代である。
糸を手作業で紡いでいた時代とは異なり、現代では機械を使うことで糸を簡単に作り出すことができる。人間関係も同様で直接会って話すことで作り出されていた人間関係は、SNSを利用することで簡単に作り出すことができる。今や誰とでも直接会うことなく知り合えるような時代になっているのである。しかし、簡単に作り出された人間関係は糸のように切ることも簡単である。
また、糸は一本だけでは弱い。現代の人は自分の意見を強調することが苦手である。自分は間違っているのではないかと、他の人の意見の方が良いのではないかと考えるからである。しかし、糸を織れば強度が上がると同様に、複数人と意見が同じであれば、意見を強調することができるようになる。
以上のことから私は現代は糸の時代であると考える。(A状況)

* A状況と判断した理由

現代という時代に対して独創的な発想に基づいて比喻しており、冒頭部で端的にまとめられている。また、適切な論拠を示しており、文章構成及び論理も適切で効果的に表現されている。さらに、波線部(~~~~)で自らの論拠を別の視点から多角的に見直しており、非常に説得力があると判断した。

イ 課題

- (ア) 論理的な文章を要約するのに時間が掛かり、中途半端な要約になっている生徒が複数いた。要約する力を定着させるために、繰り返しの練習が必要である。
- (イ) 自らの書いた意見論述文に対して、適切な構成や展開になっているか、うまく判断できていない生徒がいた。客観的に判断できるようにするために、論理的な文章の「型」についての知識・技能を定着させる必要がある。
- (ウ) 自らの主張に対する論拠を的確なものにするために、生徒の論理的な思考力を向上させる工夫が必要である。

IV 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) 本研究を進めていくに当たって、論理的な文章の構成や展開には一定の論理の形式・法則があり、それを論理的な文章の「型」と捉えたが、この「型」を具体的に整理することができた。また、授業後のアンケートから、「型」を基にして論理的な文章の読解及び意見論述をすることが、生徒にとって効果的だということが分かった（表6）。

表6 授業（検証授業Ⅱ）後のアンケート結果

（4…あてはまる，3…ややあてはまる，2…あまりあてはまらない，1…あてはまらない）

項目	4	3	2	1
論理的な文章の組み立て方は理解できた。	57.5%	42.5%	0.0%	0.0%
論理的な文章の構成の「型」は理解できた。	67.5%	32.5%	0.0%	0.0%

また、生徒の感想の中に、「論理的文章というとなんか敬遠しがちでしたが、きちんと読解できる技術を身に付けられたらそんなに嫌なものでもないと思いました。人と違う発想の仕方や、文の組み立て方は何となくでもとりあえずは理解できたと思うので、その力をもっと付けていきたいです。」というものがあつた。文章の構成や論理の展開のさせ方を改めて意識した上で、文章読解や意見論述に活用することで論理的な文章の理解が深まったと考えられる。

本研究を進めていくに当たって、論理的な文章の「型」という、非常に抽象的なものを可視化するために、図解化した学習モデルを作成した。この図解化した学習モデルは、文章読解だけでなく要約指導の際にも利用した。今回作成したモデルを基に、今後更に改良を進めていき、より効果的な教材として活用できるように可能性を広げていきたい。

- (2) 論理的な文章の「型」を活用する指導を繰り返した。その結果、文章読解と意見論述を関連付けて俯瞰的に文章を把握することができたようである。生徒のコメントからも、教材文の読解で得た知識・技能を意見論述に活用できたことがうかがえる（表7）。

表7 授業（検証授業Ⅱ）後のアンケート結果とコメント

（4…あてはまる，3…ややあてはまる，2…あまりあてはまらない，1…あてはまらない）

項目	4	3	2	1
教材文を参考にして意見論述できた。	35.0%	55.0%	10.0%	0.0%
授業（検証授業Ⅱ）後の生徒のコメント 「接続詞や構成の仕方がよく分かった。」 「文章を図のように見ることで、文章の読解がしやすくなった。」 「論述しながらもう一度本文を読むと理解しやすく、論述と読解がつながっていると思った。」				

また、教材文の読解で得た知識・技能を意見論述に活用することもできたようである。例えば、検証授業Ⅰにおいて、教材文の筆者に対する意見の論拠として具体例を考える際に、教材文の論拠の立て方を参考にしながら考えた生徒が多数いた。また、検証授業Ⅱにおいて、論述文のテーマを考える際には、教材文で使われている比喩法を使って発想したことも関連付けの成果として挙げたい。

- (3) 構成の「型」を選択し、その「型」のモデルに従って主張と論拠を論述していくことを目標として、研究並びに検証授業を行ってきた。検証授業Ⅱでの意見論述ではそのねらいどおりに、大半の生徒が論理的に意見論述できた。また、要約や考えを深める方法を、段階的に順序よく行うことで、何も書けない生徒や何も思い付かない生徒はいなかった。さらに、グループ活動によって他者の考え方や理解の度合いを知り、自らの意見論述に活用できたことは成果として挙げたい。

内容を見ても、教材文で使われている論理を自らの意見論述に活用している生徒が多く見られる。例えば、検証授業Ⅱでの教材文は、現代という時代について善悪の両面から言及しているが、その見方を生徒も同じように使った跡が見られる。物事を多面的に見ることを学び、それを論述に生かしていることから、今後も論理的な記述能力の向上が期待できる。

次に、検証授業Ⅰと検証授業Ⅱを通して生徒の論述がどのように変容したのか、ある生徒の例を挙げる。

(要約例 要約①)

人間は自我に組み込めないもの、自我の安定を乱すものに恐怖する。とりわけ死の恐怖は、動物にはない消滅することへの恐怖も含まれている。だが、死を自我に組み込むことができれば恐怖は軽減される。また、安定した秩序をもつ世界の法則が覆されることにも恐怖する。すなわち恐怖心の強い人は、自我を狭く固め、抑圧している人である。怖いもの見たさという現象は、貧困になった自我…

(未完成のまま提出。)

(論述例 検証授業Ⅰ)

私は、筆者の、恐怖とは自我の安定を崩壊させるものであるという主張に賛成です。

私はクモが苦手で、家の中でクモを見つけ、たとえそのクモを退治してもらった後でも、その後2、3日はびくびくしてしまいます。ですが、もし、クモが日本ではとても珍しくなり、価値が急激に上昇したとしたら、どうでしょうか。私はきっと大喜びでクモを捕まえ始め、クモが怖い存在ではなくなることでしょう。それは、クモという存在が自我に組み込まれるからだと思います。

以上のことから、私は筆者の、恐怖とは自我の安定を崩すものであるという主張に賛成です。

(B状況)

*「判断基準」は8, 13ページ参照

(論述例 検証授業Ⅱ)

私は、現代はドローンの時代だと考える。

まず第一に、ドローンは高い所からの視点で撮影をすることができる。ドローンの誕生によって、今まで地形などの問題で撮影が不可能であった場所でも、容易に撮影を行うことができるようになった。しかし、逆に言えば、様々な知られたい情報や知るべきではない情報をも撮影されてしまうということである。意図的であるに問わず、こういった情報が流出することで、大問題に発展してしまうということもあり得ないことではないのだ。

第二に、ドローンは我々人間の手によって、意のままに操ることができる。もはやそれは、もう一人の自分であるかのような自由度である。しかし、意のままに操ることはできても、それは感情の伴わないロボットに過ぎず、自分ではないのである。

以上のことから、私は現代はドローンの時代だと考える。

(A状況)

*「判断基準」は16, 21ページ参照

要約①(検証授業Ⅰの最初)では、教材文から文章をそのまま抜き出して要約しようとしていた。そのため、論理も教材文と同じ流れになっており、150~200字という字数制限に入りきらずに未完成のままになった。

しかし、検証授業Ⅰでの意見論述文では筆者の主張を端的にまとめており、文章構成も双括式の「型」にしっかりと取まっている。やや論拠の内容に理解不足な点はあるものの、意見論述文としての体裁は整っている。

そして、検証授業Ⅱでの意見論述文では、自らの意見が明確に示されており、その論拠も的確である。また、波線部(~~~~)で自らの論拠を別の視点から多角的に見直して検証されており、考えが深まった跡が見られる。発想自体はやや平凡ではあるものの、十分評価できる論述だと判断した。

- (4) 検証授業Ⅱ実施後のアンケートでは、「今後の文章読解に活用したい。」という項目に、90.0%の生徒が「そう思う。」、10.0%の生徒が「どちらかといえばそう思う。」と答えた。また、「今後の意見論述に活用したい。」という項目に、92.5%の生徒が「そう思う。」、7.5%の生徒が

「どちらかといえばそう思う。」と答えている（表 8）。この結果から、論理的な文章に対する生徒の学習意欲は高まりつつあることがうかがえる。

さらに、「接続詞の使い方や、読んでいくとき注目すべきところがあると分かった。実際に書いてみて、難しかったけれど、友達と読み合ったらとても面白くて、前より論述が好きになった。」という生徒のコメントからも、今後、論理的な文章に対する、より積極的な学習が期待できる。

表 8 授業（検証授業Ⅱ）後のアンケート結果

（4…あてはまる，3…ややあてはまる，2…あまりあてはまらない，1…あてはまらない）

項目	4	3	2	1
授業で学んだことを今後の文章読解に活用したい。	90.0%	10.0%	0.0%	0.0%
授業で学んだことを今後の意見論述に活用したい。	92.5%	7.5%	0.0%	0.0%

2 今後の課題

- (1) 論理的な文章の「型」を知識・技能として定着させる必要がある。

検証授業Ⅰ・Ⅱを通して、論理的な文章の構成の「型」を理解できたとする生徒が大半であったものの、それが定着したとは言い難い。ワークシートや補助プリントに頼らずに活用できる知識・技能として、繰り返しの学習を行うことが必要である。

また、検証授業Ⅱ実施後のアンケートの中に、「どのように書けば意見論述できていると言えるのか自信がない。」というコメントを書いた生徒がいた。正しい意見論述の姿がうまくイメージできないということは、意見論述についての知識・技能が定着されていないことを意味している。今後も、文章読解と意見論述を関連付けさせる指導の継続が必要だと考えられる。

- (2) 論理的に記述する能力を更に向上させる必要がある。

検証授業Ⅰ・Ⅱで書いた意見論述文では、非常に独創的な意見や的確な論拠も見られたが、全体としてはまだ不適切な部分も多い。また、更に複雑な文章読解や意見論述にも対応できる技能が必要となる機会も予想される。的確な論拠の立て方や、より効果的な構成・展開の仕方を学ばせるために今後の指導の工夫が求められる。

- (3) 文学的な文章の「型」についても研究していく必要がある。

今回の研究では、研究対象として論理的な文章に焦点を絞ったが、文学的な文章にも同様に「型」を活用した文章読解が可能なのではないかと考えている。修辞法などの研究を重ねていき、比喩法以外の表現の「型」についても図解化を行い、より汎用性のある文章構造の可視化を図りたい。

〈引用文献〉

*1) 田近洵一

井上尚美 『国語教育指導用語辞典』 教育出版

〈参考文献〉

- 文部科学省 『高等学校学習指導要領解説 国語編』 平成22年 教育出版
- 鹿児島県総合教育センター 『研究紀要 第117号』 平成24年
- 樺島忠夫 『文章構成法』 昭和55年 講談社
- 佐藤信夫 『レトリックの記号論』 平成10年 講談社学術文庫
- 佐藤信夫 『レトリック感覚』 平成13年 講談社学術文庫
- 佐藤信夫 『レトリック認識』 平成14年 講談社学術文庫
- 野内良三 『レトリック辞典』 平成17年 国書刊行会
- 久恒啓一 『図で考えれば文章がうまくなる』 平成17年 PHP研究所
- 森 敏昭・中條和光 『認知心理学キーワード』 平成17年 有斐閣双書
- 石黒圭 『文章は接続詞で決まる』 平成20年 光文社新書
- 石黒圭 『「予測」で読解に強くなる!』 平成22年 ちくまプリマー新書
- 村山涼一 『論理的に考える技術 (新版)』 平成22年 サイエンス・アイ新書
- 細谷功 『アナロジー思考』 平成23年 東洋経済新報社
- 倉島保美 『論理が伝わる世界標準の「書く技術」』 平成24年 講談社
- 清道亜都子 『書くことの教育における理論値と実践知の統合』 平成25年 溪水社

長期研修者〔 木下 景介 〕

担当所員〔 宮永 治 〕

【研究の概要】

本研究は、「論理的な記述能力の向上」を図るために、論理的な文章の「型」を通して文章読解と意見論述を関連付けた学習指導を実践研究したものである。

具体的には、まず、論理的な文章の「型」の理解及び活用を図るための指導計画（学習過程）を構想した。次に、文章を要約する上で、文章構造を可視化することで文章読解と意見論述の関連付けを図り、文章読解によって身に付けた知識・技能を意見論述に活用させる学習を行った。さらに、論理的な記述能力の向上を図るために、文章の構成・展開を意識して論拠を明示することを指導した。

その結果、論理的な文章の「型」を具体的に整理することができ、その「型」を活用することで、生徒が文章読解及び意見論述の方法を理解した。また、生徒の学習意欲も向上した。

【担当所員の所見】

本研究は、21世紀の社会を生きる生徒に求められる、論理的な記述能力の向上を目標として取り組まれたものである。研究における指導上の工夫として考案された、段落相互の関係を指す「構成の『型』」、文と文相互の関係を指す「論理の『型』」、語と語の関係を指す「表現の『型』」という3種類の「論理的な文章の『型』」を理解し活用することは、論理的な文章に苦手意識をもつ高校生にとって、文章を読解し、意見論述を行う上でとても効果的なものであった。

2回の検証授業は、いずれも、「読む能力」と「書く能力」を関連付けた単元構想に基づいて行われた。検証授業Ⅰでは、主に「読むこと」に、検証授業Ⅱでは主に「書くこと」に重点を置いて指導を行い、生徒が主体的に「論理的な文章の『型』」を活用して論理的な文章を読解・要約し、自らの立場を明確にして意見を論述することができた。

本研究の成果が広く還元されることで、論理的な文章を読むことや書くことに対する生徒の苦手意識が払拭されることと期待する。